

■ ショスタコーヴィチ／交響曲第 15 番イ長調 Op.141

ソ連を代表する作曲家の一人、ドミトリー・ショスタコーヴィチ（1906-1975）の最後の交響曲である。すでに病魔に侵されていた1971年の夏に作曲され、翌年1月に息子マキシムの指揮で初演された。声楽交響曲を2曲、書いたあと、彼は純粋な交響曲形式へともどり、古典的な4楽章構成を踏襲している。おそらく最後の交響曲になることを意識していたからなのだろう。以前の曲に満ちていた暗い情念が、ときおり人生を回想するようなユーモラスな楽想に代わっている。

ショスタコーヴィチ自身が子供時代のおもちゃ屋だと述べた第1楽章アレグレットは、おそらく幼い頃から作曲を始めるころまでの自分を描いていると想像される。弦楽の刻むリズムにのせて、フルートが吹いていく軽妙なメロディが明るく、諧謔的にも感じられる。トランペットによる第2主題のあと、ロッシェニの「ウィリアム・テル」序曲の「スイス軍の行進」から主題の一部が引用される。間をおきながら5回、繰り返され、自作の引用をほめかすフレーズも出てきて、自画像風の印象を強めるのだが、なぜか終始、不気味な雰囲気漂っている。第2楽章アダージョは対照的に悲劇的な音楽へと転じる。金管による憂鬱なコーラルにチェロのモノローグが続く。この応答が3回、繰り返され、管楽器による無調の和音がこれを断ち切る。後半はラルゴの葬送行進曲となり、クライマックスののち、コーラルの主題が再現される。ラルゴの葬送の音楽がもどったのち、休みなく第3楽章アレグレットへ続く。

第3楽章は短く、グロテスクなスケルツォ。低音のドローンが響く中、上っては下りてくるクラリネットの主題や、中間部のトロンボーングリッサンドなど、楽想の身振りがニュアンスたっぷりである。カスタネットやシロフォン、ウッド・ブロックなどの小物打楽器の活躍がコミカルで、第1楽章の軽妙さを想起させる。

第4楽章のアダージョの序奏はワーグナーの《ニーベルングの指環》の「運命の動機」の意味ありげな引用で始まる。続いて《トリスタンとイゾルデ》の前奏曲冒頭のモチーフで、アレグレットの主部へと流れ込み、そこで響くのがグリニカの歌曲の引用。中間部はパッサカリアで、8回の主題反復を繰り返して、クライマックスに至る。主題再現部が「運命の動機」の7回目の引用で始まり、《トリスタン》の動機も再現。「運命の動機」はすぐに8回目がきこえてくる。弦合奏の保続音の上で、前3楽章のモチーフが断片的に響き、第1楽章のフルートの楽想や小物打楽器が回帰して、静かに消え入るよう終結する。

白石美雪

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。